

やまぼうし



第6号
2023年4月



陶磁研究やまぼうし会
YAMABOUSHI CERAMIC ART RESEARCH SOCIETY

陶芸を、人々や豊かな明日との懸け橋に 陶磁研究やまぼうし会 会長 落合卓四郎

2022年は、コロナ禍、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻、物価高など、「不安交響曲」が鳴り響いた1年でした。そのうち、すっかり習慣となったマスク着用は、今後は緩和が進むようです。直接の面会が憚られ、なおかつ顔を覆ったやりとりが、私たちの関係性や心のありようにも少なからず影響を与えました。

当会も、コロナ禍での集会の自粛や活動拠点であるアカデミー湯島（文京区の公共施設）の改修工事のため、昨年度に続き、企画数、規模などの縮小を余儀なくされました。しかしながら、安全に配慮しつつ、会員相互、地域の方々との親しい交流を継続できたことはとても喜ばしく思います。多くを語らずとも通じ合える。それも陶芸の奥深さではないでしょうか。

この冊子を手にとられた方々に、会員の生き生きとした活動の様子をお伝えできたら幸いです。例えば、会員による恒例の文京区シビックセンターでの作品展をはじめ、陶磁研究会では芸大陶芸研究室関係者に参加いただき、未体験の絵付けを含む作陶等を楽しみました。定期活動としては、毎週金曜日の10:00～16:00に、アカデミー湯島で絵付け・焼成を含む作陶等を自由に、自主的に楽しんでいます。そのほか、毎月1回、会員有志による自主企画「天神陶塾」では、橋詰正英先生を囲んで、陶芸の多様な魅力や技術に触れる機会を設けています。対外的には、アカデミー湯島が所属するアカデミー文京財団主催の社会貢献フェア（陶芸）協賛のほか、文京区立湯島小学校での5、6年生の選択科目（図工）の授業のお手伝いを続けています。東京藝大公開講座（陶芸）の受講生が中心となって発足した当会は、その後、現在の陶磁研究「やまぼうし会」と改名、現在76名の会員を擁するまでになりました。陶芸を通じた生きがいの実現や社会貢献・交流を目的としています。2023年度もさらに充実した企画を準備しています。ご参加をお待ちしています。陶芸の楽しさをより多くの方々に味わっていただき、心のマスクも外して、穏やかで、お互いがいっそう分かり合える明日への一助となりましたら、この上ない喜びです。



ギヤラリー

〒103-0013 東京都中央区
日本橋人形町 2-16-2 ユウビル 1 階
TEL 03-6661-6865
<http://www.g-yamasaki.jp>
FAX 03-6661-6896



<展示会会期中の営業時間>11:00～18:00
*会期中は無休 会期前後日休み
<展示会以外の営業時間>11:00～18:00
*展示会以外は、日・月曜日休み（臨時休業あり）



思索の痕跡 TRACE OF THOUGHTS 三上 亮 陶とドローイング

主に陶芸作品を発表することを、ここ 40 年近く行なってきました。この展覧は、やきものだけではなく、ドローイングを含め様々な作品を「思索の痕跡」として展示しました。器を専門にする陶芸家のように見られがちですが、私の制作の実態は、日常と制作することや考えることは分けがたく、作品と言えるのか判らないものも含めて、色々なことを続けているというのが本当かもしれません。この展示は、30 年以上住んでいる仕事場のある南足柄の山の中で制作した作品で構成されています。以下、展示作品の紹介です。

・野焼きの大鉢と落ち葉の跡のついた丸陶盤 1

地面にくぼみを作り、直接ドロドロの粘土を入れて形作り、取り出して野焼きした大鉢。

同じく地面の落ち葉や野鳥の羽や小石などを写し取った大盤。(写真 2) おおきな展示空間に配置した。

・土をまるめたり捏ねた玉状の作品「Round」

手の中でできる形。上下も左右もない世界が生まれます。

・「雲」のドローイング

野焼きをしながら空を仰ぎ、刻々と変化する雲を描きとどめた。灰、墨、胡桃の外皮で作った自作のインク、藍染の染料の廃液、などを使う。素材で描くということ。

・「桑の葉」のドローイング

一本の木から様々な葉を出す桑を観察することから、生成する部分、しない部分、プラスとマイナスの面 白いかたちの成り立ちが葉っぱから読み取れる。うつわ作りの虚と実に通じる。そのほかに皿や酒器の新作、地面を掘って檜の枝や藤の蔓を入れて粘土を泥にして流し込んだオブジェ、炭焼きの方法で焼いた土器、うつわのドローイングなども出品。

参考 碗形 わんなり

両の手でくみとる、はじまりの形。

必然をよそおう、姿の美しさと、空虚なる由、用をなす鑄型の方法。

筒手どり、大きさ、用途を決めずして決まる碗形に現をうつす。

2002 三上 亮 展 中村好古堂より



桑の葉 ドローイング

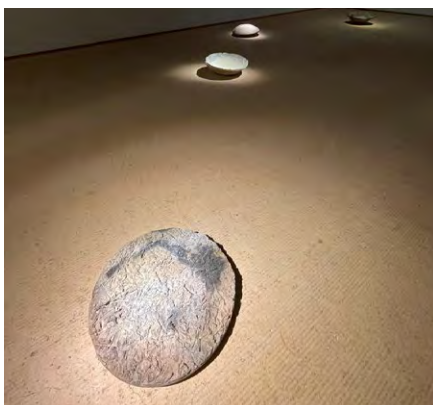
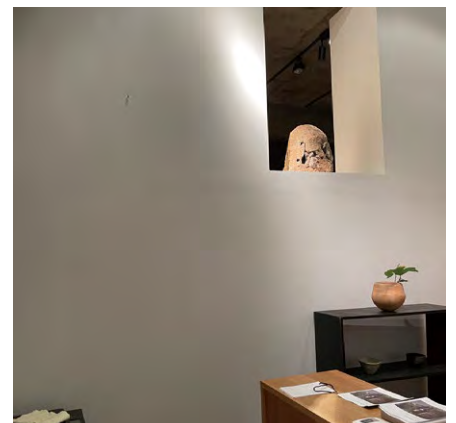
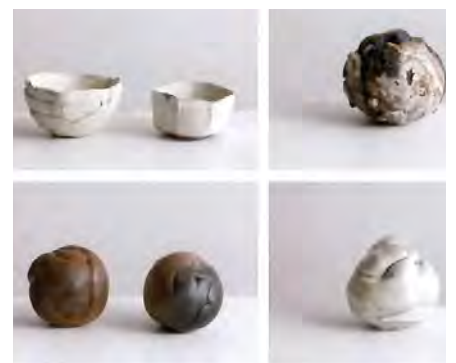


写真 2



第1回 陶磁研究会

イッチン技法&上絵を学ぶ

アカデミー湯島

2022/5.14・6.11・6.26

講師 豊福 誠 先生

アシスタント：チンサブン ヨキ・大槻 莉子・下城 爽



豊福先生によるイッチン

1日目 5月14日 作陶

文京区アカデミー湯島が会場なのに張り切りすぎて根津駅の長い階段を頑張って登り外へ出ました。

遠いですよと言われましたが小雨の中、湯島を目指しました。

静かな大きな不忍池、横山大観記念館遅刻だけどなんていいのだろう。

教室に入ると豊福先生がニコニコと作陶、マスクをした懐かしい人々。

水に触れるとぬるっとする面白い土。

難しそう！やがて次々につつりと美しい丁寧な作品ができてきました。

お掃除をして終了。

ありがとうございました。陶芸はいい！

夢中になっていて最近の悲しい出来事を忘れていました。

松葉悦子 記



5/14 アシスタント チンサンブン ヨキ

2日目 6月11日

「イッチン」ってご存知でしたか？初心者の私にとっては手に取るのは初めてですが、豊福先生によると陶磁器の表面を立体的に装飾する「イッチン」技法は江戸時代にさかのぼることです。

第1回陶磁研究会のメインイベントは素焼きをした蓋物や陶板に「イッチン」で好みの図案を描くことです。「イッチン」用の泥漿は白化粧に素焼磁土の粉末を混ぜ、これに水ガラスとCMCを加えて調整し、パンケーキの生地くらいにするというもので、担当の役員の方々のご苦労の結果、レシピの沿った泥漿が完成しました。

豊福先生のデモンストレーションを受けて下絵書き、そしていよいよ泥漿を「イッチン」に入れて勢い込んで図柄描きを始めましたが、「イッチン」に加える力とともに先端の口金を動かすスピードが泥漿の線の細さと滑らかさを決めるポイントになるようで、未熟な私には思い描いた図柄にはなかなかなりません。

さらに難題は、せっかく描いたはずの図柄が後からぼろぼろとこぼれ落ちてしまうことで、泥漿を再調整したあと図柄が簡単にこぼれ落ちないように霧吹きで素焼きの表面を湿らせながらの作業が続きました。



6/11 アシスタント 大槻 莉子

表面にわん曲がある蓋物より陶板の方が描きやすいのは確かで、蓋物を選択したことを後悔しつつ格闘すること2～3時間。撥水剤を塗って「野ぶどう」の図柄を定着させ、ホッとしたところで周りを見ると、参加者の手元には草花や魚、動物さらに絵模様など思い思いの図柄の労作ができあがっていました。

3号透明釉で作品に釉掛けしたあとは本焼きで、どのように作品が焼きあがるか楽しみです。戸惑いながらも楽しく「イッチン」技法を学んだ研究会でした。

北村 廣明 記



6/26 アシスタント 下城 爽



陶版へのイッチン

3日目 6月26日

コロナパンデミック & 猛暑日の只中、第1回陶磁研究会の3日目 [上絵を学ぶ] は開催されました。

かつて私自身豊福先生の著書にて自己流のイッチンを楽しんでおりましたため、今回直接ご指導いただけるまたとない機会と総勢30名の受講者とともに参加させて頂きました。

上絵制作手順

1 作品 (陶板または蓋物) はゼラチン液できれいに拭く。

2 上絵具 (玉ぐすり) はCMC、水を適量加えよくすり合わせる (約20分程度)

3 厚みをつけるには筆でとんとんとおくように

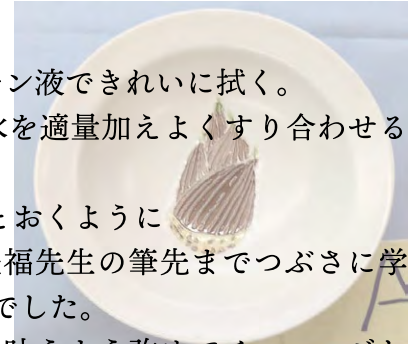
今回貴重な陶磁研究会に参加し豊福先生の筆先までつぶさに学ばせていただき、目から鱗の瞬間でした。

この受講を機会に次の作陶に反映叶うよう改めてチャレンジしたいと思います。

企画実現にご尽力下さいました皆様に心から御礼申し上げます。何よりも貴重な技法をご指導下さいました豊福先生、アシスタントの皆様にも心より感謝し御礼申し上げます。

ありがとうございました。

中山 美智子 記



第2回 陶磁研究会

中野ゼロ

2022.9.23 / 10.10

干支のオブジェを学ぶ

講師 平井 雅子 先生

アシスタント：渡邊 みゆ・保坂 朱美

第2回陶磁研究会に参加して

藝術の秋と申しますが、今年の秋は「平井雅子先生から干支のオブジェを学びましょう」に参加しました。平井先生からレクチャーの前に出来上がった作品を置く板台と、お菓子が配られ、緊張していた会場が一気に和やかになったように感じました。その先生のお心使いがなんて優しいことか！！です。さて、来年の干支は“卯”です。ちなみに先生の干支は“卯”で、「来年還暦なんです」とおっしゃっていました。午前中は全員“卯”を作るということで、参加者の皆さん自分好みの作陶を楽しんでおられ、各机ごとに「可愛い〜」「良いじゃな〜い」との声が飛び交い、先生も参加者の周囲を回って「あら可愛い！」と言いながら作陶のコツを一人一人に手を取って指導して下さいました。先生の手が一寸入るだけで、作品が目に見えて良くなることにため息が出ます。そこで、先生に「良いですね〜」と褒められると、幾つになっても嬉しいものです。一つ目の“卯”の作陶には時間を掛けましたが、皆さん4個から5個の動物を仕上げていました。二日目は上絵付け、ポイントに金を入れて作業は終了です。金はちょっと入れただけで、ドキッとするほど魅力的になります。乾燥・釉かけ・焼成は中野の方のご尽力で、全て破損なく完成しました。会員の皆さんも楽しんで参加された様子でした。親切で丁寧な指導を賜りました平井先生、アシスタントの先生方に感謝致します。

長濱 善子 記



9/23 アシスタント：渡邊 みゆ 平井 先生



平井先生：干支のうさぎ



10/10 アシスタント 保坂 朱美



第3回 陶磁研究会

アカデミー湯島

2022/12.17

色絵・釉裏紅を学ぶ

講師 橋詰正英 先生



橋詰 正英 先生



釉裏紅の壺

自然界には、光により、絵具では表現しきれない美しい色が存在します。

芽が出て、蕾が膨らみ、花が咲き、実となる。器に生き生きとした草木を映し出すとき、特に赤は難しく、顔料作りから絵付け、焼成と様々な技術が必要です。

今回、「釉裏紅」の技法講習会は、辰砂を使った赤への挑戦となりました。

<作業手順>

- 1□ 釉薬をかけ、ふのりを刷毛塗りした花器を先生に用意していただく。
- 2□ 先生の梅、木蓮、椿の図案の中から、椿を参考にしてオリジナルデザインを考える。
- 3□ 下絵をカーボンで写し、鉛筆で描き足す。
- 4□ 茶黒で骨描きをして、影、茎、枝の部分を薄く塗る。
- 5□ 絵具をふのりで溶き、花、蕾、葉に色を付ける。
- 6□ 先生に、ガス窯で還元焼成をしていただく。
- 7□ がくと花芯を上絵付で仕上げ、酸化焼成をする。

[釉裏紅] は薄すぎては色が出ず、濃過ぎては黒くなるという、理解はしていても、1度ではなかなか完成することが難しい課題でした。

橋詰先生に丁寧に教えていただき、ガス窯の還元焼成により、椿の花が白い花器にきれいに咲きました。炎の芸術は素晴らしいものです。

先生をはじめ、会場や材料の準備などをしてくださりました方々に大変感謝しております。

お陰さまで有意義な講習会を過ごすことができました。

ありがとうございました。

廣田 弘子 記



第4回 新春特別陶磁研究会

キュビズムを学ぶ

アカデミー湯島

2023/1.15

講師 三上 亮 東京藝術大学教授

アシスタント：早野 樹



三上 先生



アシスタント：早野 樹



やまぼうしからの案内資料の見出しに表題の文字が目飛び込んできた、遠近法や立体を平面にという、あの難解なお話になるのかなと、一瞬、頭をよぎりました。

資料を読み進めると、「ポキポキと1センチ四方に折った」などの文が続いて、「設計図もなく、自らのゆらぎのままに積み上げてゆく技法」とあった。そういえば、三上先生の作品でそんなのを見たことがあることを思い出した。これは先生の洒落であり、あのキュビズムではなく、キューブツム（積む）のことであると察しがついた。

先生の洒落もなかなかのものだと感心しました。

「設計図もなく、自らのゆらぎのままに」も、アバウトな自分にピッタリだと思い、早速、申し込むことにしました。

当日は、先生のキュビズムの説明は想像通りのもので、難しい話にならなくてホッとしました。

先生の実演は、いとも簡単そうにアバウトに折ったキューブを積み上げていらっしやるのを見ながら、これなら自分でも出来そうだと思ってしまいました。

一通りの説明が終わって、役員の方が事前に用意してくださった材料のご苦労に感謝しながら、いよいよ実習を始めてみるとなかなかの難物であることがすぐに判りました。

まず1つ目は、せっかく手で折ったキューブの断面が、土べで潰れてしまい意図とした表現が出ない事、仕方なく土べ攪拌用のマドラーを使って底面と側面に土べを塗り、急いでキューブを貼り付ける、調整しようと動かすと接着が悪くなる。いかに「自らのゆらぎのままに」と言っても少しは見栄えも考えなければと思い、土べの濃度を調整したり悪戦苦闘でした。

2つ目は、全体のホルムがままならない事、底の面を八角にしていたつもりが、完成形は丸い筒状に仕上がった、「自然のゆらぎ」とは申せども、あまりにも不本意な形状になってしまったのは残念。

3つ目の問題点、ポキポキとは行かない事、下の方はともかく上の方のポキポキはやはり8ミリ程度の厚さにしたかったが、棒状に切るタイミングが早かったのか？最初の折りやすい時に、上の方を作っておくべきであったのか？今後の課題となった。

後の懇親会のときに、土べの付け方をお尋ねしたところ、先生は一作業ごとに指を雑巾で拭いておられたとのこと。作品の手元ばかりを見つめていた私の不覚でありました。みなさま、再挑戦の折は、ぜひとも一回一回指をきれいにしてお作業することをお勧めです。

以上、有閑無収（ムッシュ）の悪戦苦陶器でした。 近藤 健 記

第5回 陶磁研究会

アカデミー湯島

2023/2.12,3.4

ひび割れ技法

講師 関口 貴仁 先生

アシスタント：太田 実来・早田 有花

第5回陶磁研究会「ひび割れ技法」

ひび割れ技法は22年1月に西村圭生先生の講習会がありました。今回の関口貴仁先生はほとんど全ての会員がやったことがない実にユニークな技法を用いて2種2作品を制作するものでした。2月12日の初日は二通りの作陶の実演の後、用具(ドライヤー)の使用タイミングが重ならない様に全体を2グループに分けそれぞれが用意された2種類の粘土で制作開始、的を射た用具の手配、ポイントの板書等、先生の卓越した指導で全員が時間内に無事完成となりました。3月4日は釉薬掛けと共に二通りの技法の応用4態の実技紹介、また先生のご厚意で用意された特別な粘土(金属&シリコンカーバイド含有)で3個目の作品を自由に制作。内容の濃い充実した1日でした、滞米経験から

徒に技巧追及に走らず合理的に作陶自体を自由に楽しむという先生の姿勢が皆にも伝わり、終了後には「楽しかった」の声が全ての参加者の口から聞かれる有意義な研究会でした。有難う御座います。

吉村 計 記



関口 貴仁 先生



2/12 アシスタント：太田 実来



3/4 アシスタント：早田 有花



陶磁研究やまぼうし会 第6回作品展

文京シビックセンター
アートサロン 展示室2
2022.11.17 ~ 2022.11.20

『陶磁研究 やまぼうし会』として新たにアカデミー湯島に拠点を置き6年目の作品展となります。今回の展示も陶芸を存分に楽しみながら、それぞれの作風に磨きをかけた数々の作品が並ぶことと思います。会員28名に加え、「陶磁研究 やまぼうし会」がボランティアとしてお手伝いしている文京区立湯島小学校の特別支援「すずかけ学級」の生徒さんの作品も同時に展示致します。ご高覧の上、是非ご批評、ご鞭達のほどよろしくおねがいします。（挨拶文より抜粋）

東京藝術大学美術学部教授 三上 亮



三上 亮 教授



椎名 勇 准教授



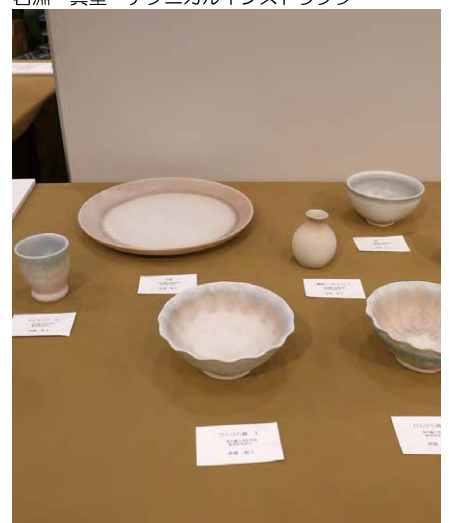
岩淵 真里 テクニカルインストラクター



茂田 真史 テクニカルインストラクター



高岡 太郎 テクニカルインストラクター



高橋 侑子 教育研究助手



中嶋 雄里 教育研究助手



椎名先生による作品説明



高野 静絵



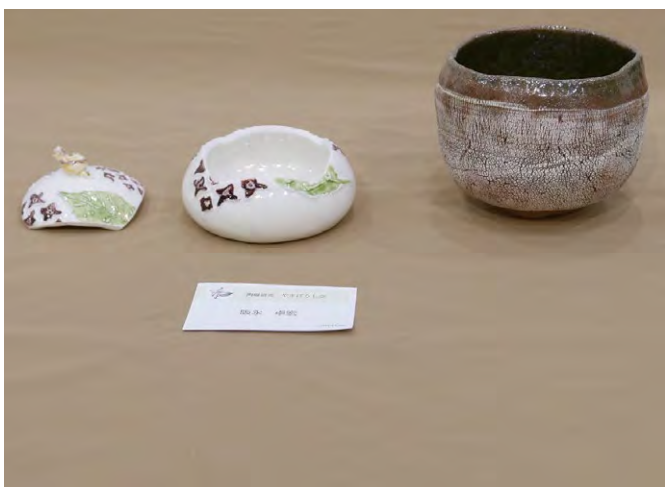
工藤 久仁子



大熊 敏幸



山中 峰雄



阪永 卓宏



落合 博子



遠藤 成夫



廣田 弘子



近藤 健



大出 ヒロ子



小松 幹夫



江原 英子



末田 寛治



吉村 計



北村 廣明



加藤 史郎



石川 久夫



落合 卓四郎



孫 語崎



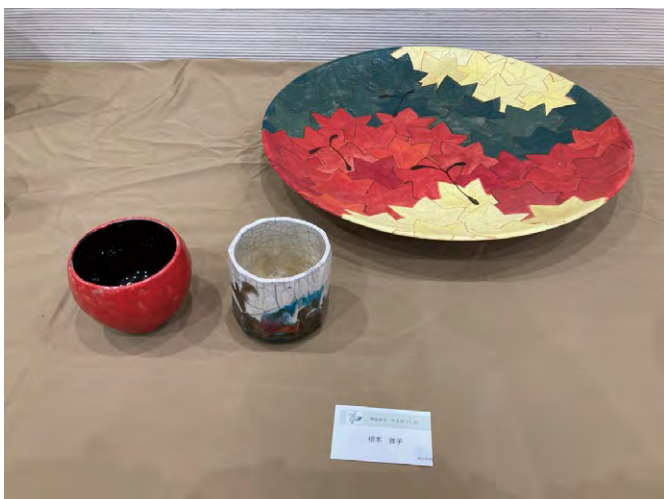
合田 隆治



荻須 謙二



赤坂 延子



根本 雅子



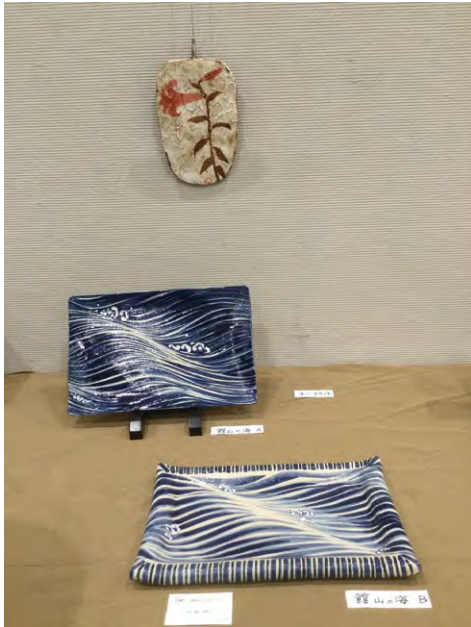
長濱 善子



鳴島 淳子



竹村 光子



多比羅 春代



海老名 志文



湯島小学校 児童作品



「見る（観る）」ということ

平井 雅子

私が担当した研究会は、「干支（主に卯）を作ろう」でした。制作指導時に心がけた事は、

- ①「制作時に何を思っているか」
- ②「その制作の目標はどんなものか」
- ③「その目標を形にするにはどう作業すれば良いか」

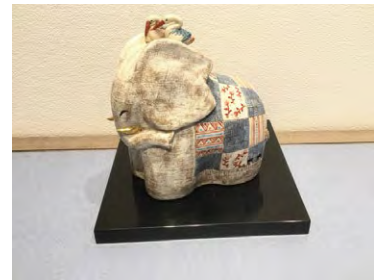
この3点を聞いて、指導・助言をしました。

皆さんの制作の様子をよく見ながら、各作業テーブルを廻り共有させて頂いた時間の中で、私自身も新しい気づきや発見を多く得られて、有意義な経験となりました。

陶芸の仕事に於いても、日常の暮らしの中に於いても、私は「よく見る（観る）」という行為が大切だと思っています。まずは物事をじっくり見て、「何なのか」・「何故なのか」・「どうなっているのか」と進んでいくと、もっと多角的な考察が広がっていきます。

対象が植物であれば、毎日観察していると新しい発見があり、そこから新しい発想を貰えます。同じ植物でも、日々目をかけていれば些細な変化に気づき、驚きや喜びが生まれます。学生時代、恩師の方々から再三言われてきた「よく見てみる」は、実は案外、やっているようでやっていない「大変愉快な事」だと思っています。

陶芸制作ももちろんですが、日常の暮らしの中で今一度、「見る（観る）」という行為を改めて丁寧に行うと、心豊かになり制作にも深みが増す、と私は思っています。



ひび割れ技法研究会を終えて

関口 貴仁

研究会では独自のヒビ割れ技法2種とシリコンカーバイト土の体験研究会を実施させていただきました。日本の伝統技法とは違い海外の技術をベースにした独自の内容なので参加者の方々にも楽しんでいただけたと思います。陶芸は無限の広がりがある物ですが長く作陶しているといつの間にか同じ事の繰り返しになってしまっている事があるなと僕自身思う事があり、今回の研究会で皆さんには再度陶芸ってまだまだ面白いなと感じてもらえることを願って内容を決めました。皆さんの普段の作陶の常識からかけ離れたアプローチなので受け入れ難いかなと懸念していましたがいざ講習会になると皆さんのキラキラした表情を見れてホッとしました。完成作品は見る機会がありませんでしたがきっと皆さんのこれからの陶芸ライフに刺激的な仕上がりになったと思います。

常識にとらわれず遊びの中から楽しさを発見してってください。研究会が皆さんの作陶の一助になれることを祈っています。

会員完成作品



第6回 作品展について



昨年の秋深まる11月に陶磁研究やまぼうし会による第6回作品展を拝見し、僭越ですが作品の感想をお話しさせていただきました。会場で感じましたことは物を作る楽しさや新しい事を学ぶ喜びに溢れているということです。

陶芸には長い歴史があります。伝統的な技法や作家個人によって独自に発展させた技法など、様々な技法が現在まで伝わっております。それらの技法の根本となる素材特性の活かし方を理解し、自分の物とすることで独自の表現に辿り着くと考えております。皆さんが学ばれた技法の中に、自分らしい色彩、形態、モチーフを取り入れてゆくことで、さらに魅力的な作品になるのではと感じました。

また、同時展示された湯島小学校の生徒さんの作品を拝見して物作りの楽しさが次世代にもしっかりと伝わっていると実感いたしました。

今後も作品発表や地域ボランティア等の活動を通じて、実素材で物を作る楽しさを社会に広めていかれることを心より願っております。

東京藝術大学美術学部准教授 椎名 勇



陶磁研究やまぼうし会支援活動

東京藝大陶磁研究室にて陶芸を学ぶ学生支援・寄付活動報告

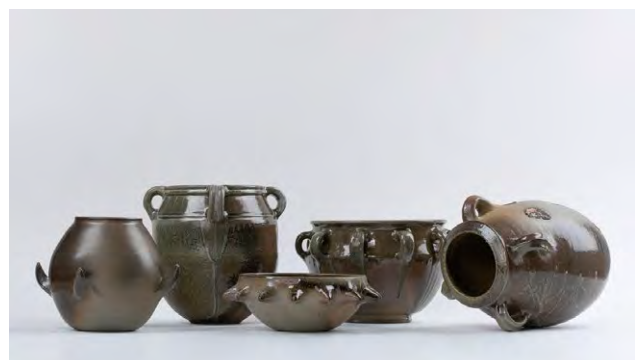
合田 隆治

登り窯、薪窯焼成用赤松立伐採、薪加工運搬納入一式

2022年11月22日東京藝大取手校内にて、立案者の当会員・山下順弘理事と関係法人各位による皆様方のご厚意により、取手校内登り窯等に使用する赤松薪を寄付及び運搬搬入実施いたしました。やまぼうし会からは、合田が現地案内とお手伝いの受け入り作業をしました。

大型特殊トラック 2台 ・1トンフォークリフト 1台、作業員 3名、赤松割り薪 10パレット
陶芸研究室先生方の、ご理解のもとに、運搬業者作業員、取手校地の高岡先生、陶芸専攻学生の応援を得て、荷下ろし移動が順調に進み完了しました。

山下様及び関係法人各位には、ご厚意・ご支援に感謝申し上げます、お礼申し上げます。



穴釜焼成した イド・ファーバー大学院生 作品

やまぼうし会会長【落合卓四郎・博子ご夫妻】叙勲受章祝詞

山下 順弘



昨年春の叙勲、落合会長ご夫妻は長年の教育研究功勞により「瑞宝中綬章」の榮に浴されました。

私達には新生やまぼうし会発足当時より会長職として会を纏めて頂き法人としての熟成に多大の尽力を注いで載きました。

此処に改まして活動促進への謝意と榮に対し心よりお慶び申し上げます

故岡潔博士文化勲章受章のエピソードに就寝時も着替えず普段着で休まれ枕元にメモ閃めきにはすかさずメモられたとの夫人談がございました。

落合先生も同じパターンでそれのみではなくおやすみ中の夢的像が夫人にのり移り解せぬ凶形・記号・数式が「ホワホワ」と浮かぶのだと起床時に毎朝「〇〇せねば!」「××セネバ!」と言って此方の眠さに関係なくガバッと起き上がられた様です 先生の渾名がいつしか「ネバネバ男」に私達の朝食の「納豆」のお話ではございません。

健康に留意され教育界は無論 当会活動に更なるご尽力を願えればと熱望しております。

寔におめでとう存じました。



2022 年度 藝大公開講座「楽茶碗を作ろう」に参加して

荒井 さつき

昨秋（2022/9/17-18, 9/24-25）に開催された公開講座「楽茶碗を作ろう」に参加いたしました。楽茶碗作りを、かねてから一度はやってみたいと思っておりましたが、窯を2つ同時に用いる必要もあり、なかなか機会に恵まれませんでした。昨年7月に当講座の募集を見つけ、当選しますようにと祈る思いで応募しました。

秋晴れの朝、弾む気持ちで久々に藝大の門をくぐりました。素晴らしい講師陣の手厚いご指導のもと、やまぼうしの皆様等と共に作陶にとりくみました。私が選んだ手法は、成形、手びねりで、土は単色とマーブルをひとつずつ作りました。釉薬は7種類もあり、筆で塗るのが新鮮でした。空冷、急冷、炭化の冷却法から、急冷と炭化を選びました。冷却後に濡らした新聞紙を開けると、みどり釉が還元され、息を飲むような見事な赤に変化していました。それを見た時の驚きと感動は忘れられません。

もう一度参加したいと思う大変有意義で楽しい講座でした。

安全を期して、熱心にご指導を下さいました講師の先生方に、改めて感謝申し上げます。

* やまぼうし会からも 12 名参加いたしました。



陶芸への道 小松 幹夫

幼少の頃、祖父の膝上にて説明を受けた中国産青花蓋物の陶製品が今でも目の奥に蘇る。夕食の席上で祖父や父が、飲酒の為の爛付けのために、炭火の入った涼炉の上で熱燗用焼徳利を樂しげに用いていた事も昨日の様に思い出される。

信州高遠城内に飲料水を導くための、素焼きの土管を見た時の驚きは、陶製品について一層興味を持つに至った。

縄文前期の土器が九州松浦地方において発見された報が、昭和44年(1969年)

にあり、約一万二千年前のものとのことで、世界最古の土器らしいものが我が国で焼かれていたことは、陶芸への道に想いがつものり、ついに自作で三連登窯を山梨県大泉に築き今日に至っている。一人でも多く、伝統ある陶器に親しんでほしいとの思いが募る今日この頃である。会員の各位が益々の研鑽を積まれることを切に祈る次第である。



竹古緑釉壺・小松不朽作



私の陶芸 戸松 令子

自分なりの陶芸への思いをお話します。陶芸を始めたころは、この世界の頂点に立つ方々の作品を見て、自分には無い感性と技法の持ち主とため息をつき、一主婦の趣味の域を出ることは出来ないと決め込んでいました。しかし、ある時、諦める前に何事も学ぶ努力が必要であり、自分がそれを怠っている事に気が付きました。そして、独学ではなかなか難しいと思い、それ以降、県活の指導者養成・先生養成講座に始まり、東京藝術大学の公開講座を受講し、基礎から学ぶ事にしました。藝大の先生方、学生さんたち、受講修了生の方々からいろいろと教えていただく事ができ、また、その後は海外のシンポジウムに参加し、地域で指導される先生や同好の方々との学ぶ場を多くいただきました。それらによって、陶芸を樂しもうという意識と意欲も一層つよまりました。様々な幸運に恵まれ、今の充実を得られたことに感謝すると共に、その気持ちを学生さんへの支援、支援学級の指導に続けて行きたいと思っています。私自身難病も抱え、1級障害者となってしまいましたが心身ともに常に支えてくれた家族、特に夫には大いに感謝しなくてはならないと思っています。



鉄線文皿



線彫文壺

文京区「生涯学習フェア」へのお誘い

陶磁研究 やまぼうし会 有志会員による自主企画「天神陶塾」で作陶、絵付けなどで制作した作品の展示会で「生涯学習フェア」に参加します。

本年6月6日開催のアカデミー湯島利用者懇談会に出席したおりに、当会に、シビックセンターで開催される生涯学習フェアへの参加を打診されました。詳細は区広報誌「スクエア」11月号にて発表されるとのことです。

自主企画では毎週金曜日にアカデミー湯島の施設を借りて活動しており、また自主企画のなかの「天神陶塾」では毎月1回第1土曜日に橋詰正英先生をお迎えして制作しています。過去数年にわたる活動実績により参加されていた会員はかなりの数の作品を作り貯めています。しかし、当会の「作品展」には出展することはありませんでした。と申しますのも橋詰先生のご指導の元先生の美しい立派な絵柄を使わせていただき作陶しておりますので、オリジナリティーに重きを置く作品展には出展がはばかれる事情がありました。そこで今回アカデミー湯島より提案頂いた生涯学習フェアに「天神陶塾」のおさらい会として参加する企画を考えました。橋詰先生にご参加いただき、作品の講評を頂きます。

顧問 橋詰正英 塾頭 落合卓四郎 副塾頭 赤坂延子 副塾頭 落合博子



新会員紹介

会員番号 2014179 古河 久代

文京区の体験講座を受けた時、教えてくださる先生方の年齢層が広くて一緒に陶芸をさせていただいたら楽しいだろうなと思い、入会いたしました。マイペースで陶芸ができたと思います。



社会貢献 文京区立湯島小学校選択美術コースのお手伝い



小林 龍先生

『すずかけ学級の陶芸体験』2022年5月24日作陶、6月11日彩色
『5、6年生の陶芸体験選択授業 おくりものを作ろう』2022年11月10日作陶、2023年11月10日彩色・釉掛け

今年度は4回に渡り、いずれも湯島小の小林 龍先生による陶芸体験授業のお手伝いがありました。

すずかけ学級の焼き上がり作品は当会の作品展会場に展示されました。(15 ページ参照)また「おくりもの」のテーマではお父さんにビールを飲んで貰うピアジョッキや普段使いのお皿、猫や龍の置物と様々なカタチが作られました。陶芸を選択するだけあって、どの児童も土いじりを楽しんでいる様子。絵付けも絵の具を共有し合い、無事に終了。素焼き作品の釉掛けも作者本人にやってもらう事となり、冷たい釉薬に最初は躊躇していましたが次第に慣れて、作品を掴んで面白そうに浸していました。毎回、子供たちの微笑ましい姿を見ることができる良い機会となっています。

尚、作品の素焼き、本焼き共に当会員により湯島アカデミーの電気窯で焼成しております。



珠玉 ギャラリー



取扱作家

- 豊福 誠、三上 亮
- 上田哲也、望月 集
- 丹澤裕子、林 妙子
- 深谷 泰、百田 輝
- 平井雅子、今井一美
- 椎名 勇、長谷川奈津
- 高岡太郎、小林佐和子 他

使い込むごとに魅力が増す日常の作家ものの工芸品を扱っております。

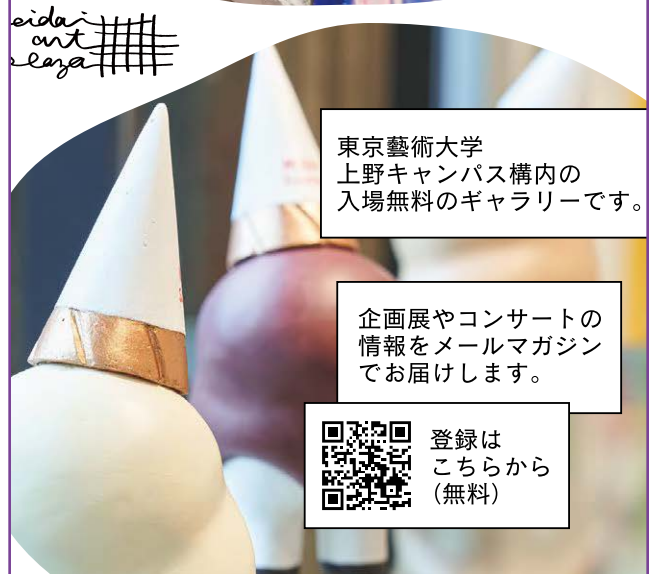
〒173-0004
東京都板橋区板橋 2-45-11
TEL 03(3961)8984
常設時は日曜・水曜・祭日定休
展覧会会期中は無休
10:00~18:00
展覧会翌週の月曜日は臨時休業
<http://www.suigyoku.com/gallery.html>



アーティストの卵に出える場所

藝大アートプラザ

artplaza.geidai.ac.jp



東京藝術大学
上野キャンパス構内の
入場無料のギャラリーです。

企画展やコンサートの
情報をメールマガジン
でお届けします。



登録は
こちらから
(無料)



利便性・機能性の両立

シンリュウは電気窯・灯油窯・ガス窯・薪併用窯・穴窯・登り窯をお客様のニーズにあわせて設計制作しております。



前扉式電気窯 MKF-10 型

カタログ
無料配布中!

シンリュウ

検索



粘土・釉薬。小道具多数ご用意!

- 初めて窯を購入される方にも安心な簡単操作と省エネ設計。
- 酸化・還元が自由自在(RFタイプ)。
- 全自動焼成装置(MRマイコン)付。
- 焼成パターンが入力済、さらに新規パターンも追加可能です。
- スタート時間の予約もできます。



最新高性能マイコン
簡単操作であらゆる
焼成パターンを設定可能。



シンリュウ株式会社

本社 (旧 新緑北橋)
〒351-0001 埼玉県朝霞市上内間木514-2
TEL.048(456)2123 FAX.048(456)2900
E-mail info@shinryu.co.jp
URL http://www.shinryu.co.jp

神奈川支店 TEL.046(295)1641 FAX.046(295)1624
北関東支店 TEL.0296(72)9950 FAX.0296(72)9952
東北支店 TEL.022(288)2651 FAX.022(288)2652
信楽支店 TEL.0748(82)4166 FAX.0748(82)4169

☆「陶芸総合カタログ」全128ページ・フルカラーを無料配布しています。ご請求は本社、各支店にお願いいたします。☆オンラインショップもご利用ください。

大倉陶園

良きが上にも良きものを
since1919



■本社店

〒245-0052
神奈川県横浜市戸塚区秋葉町 20 番地
TEL : 045-812-8588
営業時間 10:00 ~ 17:00 (土日休・祝不定休)



大倉陶園
公式 HP

■帝国ホテル店

〒100-0011
東京都千代田区内幸町 1-1-1 (帝国ホテル地下アーケード)
TEL : 03-3503-6020
営業時間 10:00 ~ 19:00 (日曜・祝日~17:00)
※都合により営業時間は変更になる場合がございます。



九谷絵具・陶芸材料・上絵付筆

千園堂



〒923-1112
石川県能美市佐野町イ1-5番地
TEL 0761-58-5711
FAX 0761-58-5677

追悼



1月25日に陶社会からの会員、坂口明美さんがご逝去されました。坂口さんは昨年の豊福先生の研究会に参加され人生最後の素晴らしい作品

を残されました。ご遺族は坂口さんの遺作展の開催を考えておられるそうです。

長濱 善子



小椋 正様は、2月5日、逝去されました。(享年86歳)

歯科医師&教授として65歳まで精勤。のち窯元等で作陶に邁進、芸大の研究生時代は天目を追求、ISCAEEは毎回参加。

昨年度の作品展では大作を拝見。

陶芸愛を偲びます。

竹村 光子

編集後記

迅速な取材活動、皆さんとワンチームになり楽しかったです。

> 赤坂延子

コロナ禍の中での研究会参加を躊躇された方も多かったのではないかと作陶に没入してコロナを吹き飛ばしましょう > 大熊敏幸

今年度前半はコロナ過や研究会場所のリフォームがあって活動が少なく、後半に多くの行事があり、記事をまとめるのに大忙しでした。 > 落合博子

「絶賛新入会員募集中！」です。リクルート担当もやっていますのでよろしくお願ひします > 高野静絵

作陶・絵付けへの個性的で創意あふれる作品・文章を拝観・拝読して度々胸が熱くなりました。ご寄稿に感謝！ > 竹村光子

お教え下さる先生方に恵まれた有難さ、機関誌やまぼうしをお支え下さる皆様に恵まれた有難さ、同じ趣味を持つ仲間にも恵まれた有難さ、平和の有難さに思いを致す1年でした。

> 編集長 鳴島淳子

発行年月日 2023年4月

発行責任者: 落合 卓二郎

揮毫: 島田 文雄 東京藝大名誉教授

表紙作品: 三上 亮 教授 裏表紙: 椎名 勇 准教授

